

2月13日の天気について

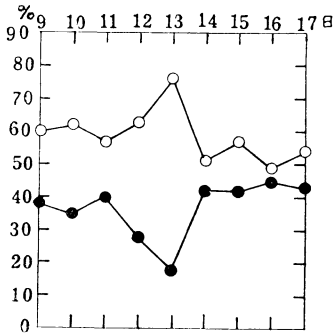
殿 村 清 人*

1. はし が き

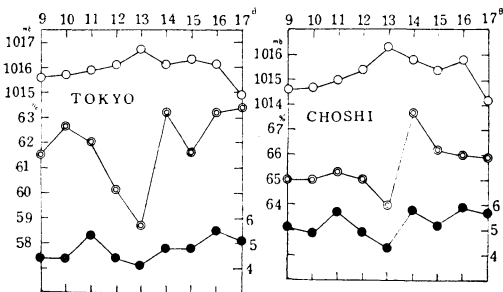
さきに筆者は11月3日に著しく天気よくなること、及びその機構について述べた〔(1), 1956〕が、ここでは同様な例として2月13日の好天気を統計的に解析し、その機構をシノプティックの立場から述べる。

2. 東京における2月13日の天気

まず資料として1951年1月中央気象台発行の予報当番者用気候表を用いて、1868~1950年迄の65年間の東京における2月13日及び前後の天気日数の年変化を調べた。その結果を第1図に示す。図中白丸は晴天率¹⁾、黒丸は



第1図 東京における2月13日前後の天気日数、白丸は晴天率、黒丸は雨天率を示す。



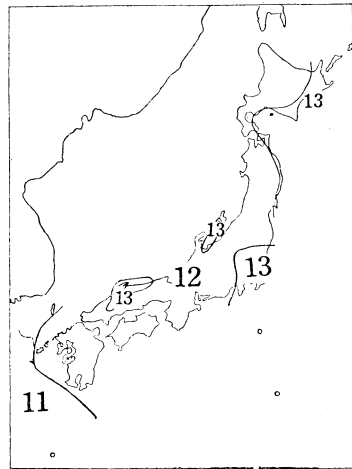
第2図 2月13日前後東京、銚子における気象要素の変化
(最上段は日平均気圧、中段は日平均湿度、下段は日平均雲量)

雨天率*を示し百分率で表わした。ここで晴天とは各暦日における65年間の快晴および晴の日数の和である。第1図より2月13日はその前後の日と比較して晴天率が著しく増加し、同時に雨天率が減少していることが分る。

また最近発行された月日別気候表を用いて、東京および銚子における2月13日前後の気象要素の累年日平均値の変化を第2図に示す。図中、白丸は気圧、二重丸は相対湿度、黒丸は雲量を示す。第2図より、2月13日はその前後の日と比較すると、気圧が上昇し、相対湿度と雲量が減少し、2月13日に好天となることが分る。

3. 2月13日前後の好天発現日

前節の結果によって東京、銚子においては2月13日に好天となることが分ったが、他の場所ではどうであろうか。それを調べたのが第3図である。資料は前記の月日



第3図 日平均雲量最低値の出現日 (東ほど遅くなっていることに注意)

別気候表にあるものを用いた。この図には日平均雲量とその前後に比較して最低となる日を示してある。

この結果により、2月13日に好天となる地域は主として関東地域および三陸沿岸、北海道の太平洋側で、部分的に山陰、相川辺にも発現するが、その程度は弱い。そしてその他の大部分の地域は12日に好天となり、九州以西は11日に天気よくなるように思われる。

言いかえると本邦における2月13日前後の好天というのは本邦の南西から北東に移動し、13日に関東地域に到着し、明瞭に発現したものであることがいえる。このように西から東への好天の移動は先の11月3日の場合にも

* 気象庁研修所—1957年9月23日受理—
1) 晴天率、雨天率の定義については前論文を参照されたい。

いえた結果で一般的なもののように思われる。

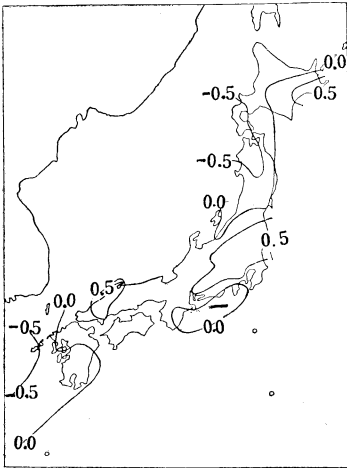
4. 2月13日の好天の特性

次に2月13日の好天の地域的分布の特性を見るために、累年日平均の日照値（資料として月別気候表を用いた）の偏差を調べた。偏差 D の計算のために前回同様次の式を用いた。すなわち

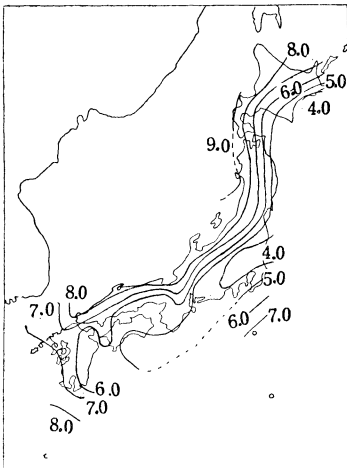
$$D = M - \frac{A+B}{6}$$

ここに M は2月13日の値、 A, B は12, 14両日を除く前3日、後3日の値の和である。

得られた結果を第4図に示してある。第4図より2月



第4図 日平均日照偏差図（単位時間）



第5図 2月13日の累年日平均雲量図

13日は本邦の中央部に日平均日照時間のプラス 0.5時間以上の区域が存在する。これと2月13日の累年日平均雨

量図（第5図）、および第3図の13日の好天発現域と比較して見て、2月13日に関東地域に好天の発現が局地的ではあるがたしかな現象であることが分る。

また第5図より、2月13日裏日本に雲量が多く、表日本に少ない。更にこの日前後に日平均雨量が少ないことを考えると2月13日には西高東低型が若干おとろえていると考えられる。（5節参照）

5. 2月13日前後の平均等圧線図

月別気候表の外に、縮刷極東天気図上で1907年から1950年までの44年間について4度おきに読みとった資料を用いて、平均等圧線図を作成したのが第6図である。

まず2月12日の平均天気図を見る。すると、2月12日はいわゆる西高東低くずれの気圧配置と考えられ、日本海にフロントル・ゾーンが存在し、本邦全域は張り出し高気圧内にある。その結果天気が良いが、関東地域では等圧線が屈曲して谷が存在して天気が悪い。なおこの谷は12日以前にも存在し、調査した期間の9日から11日に至る期間を通じて存在している。13日には全体として等圧線間隔がゆるくなり、季節風がやや弱まるとともに、関東の谷が消えて天気が良くなった。そして13日の好天が発現した。14日には張り出し高気圧が後退し、等圧線間隔が広まり季節風が弱まるとともに本邦全域に天気が悪化し、関東沖に再び谷が現われている。15日以降もこの谷が存在している。

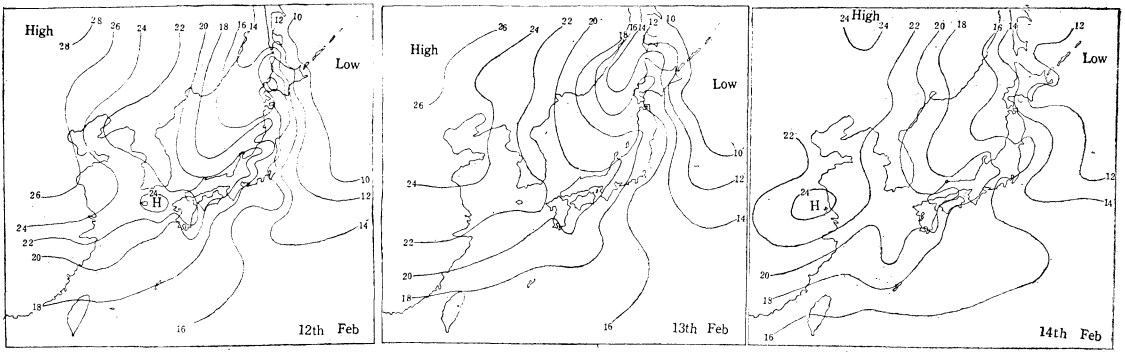
以上の事から、関東地域に発現する2月13日の好天は季節風が衰え始めるとともに、それまで存在した関東地域の谷が消えて好天が発現することが分る。

次に2月12日から2月15日までの各暦日について高低気圧位置図にプロットしたものを第7図に示す。資料として縮刷極東天気図(1907~1950年, 44年)を用いた。白丸が高気圧位置、黒丸が低気圧位置を示す。

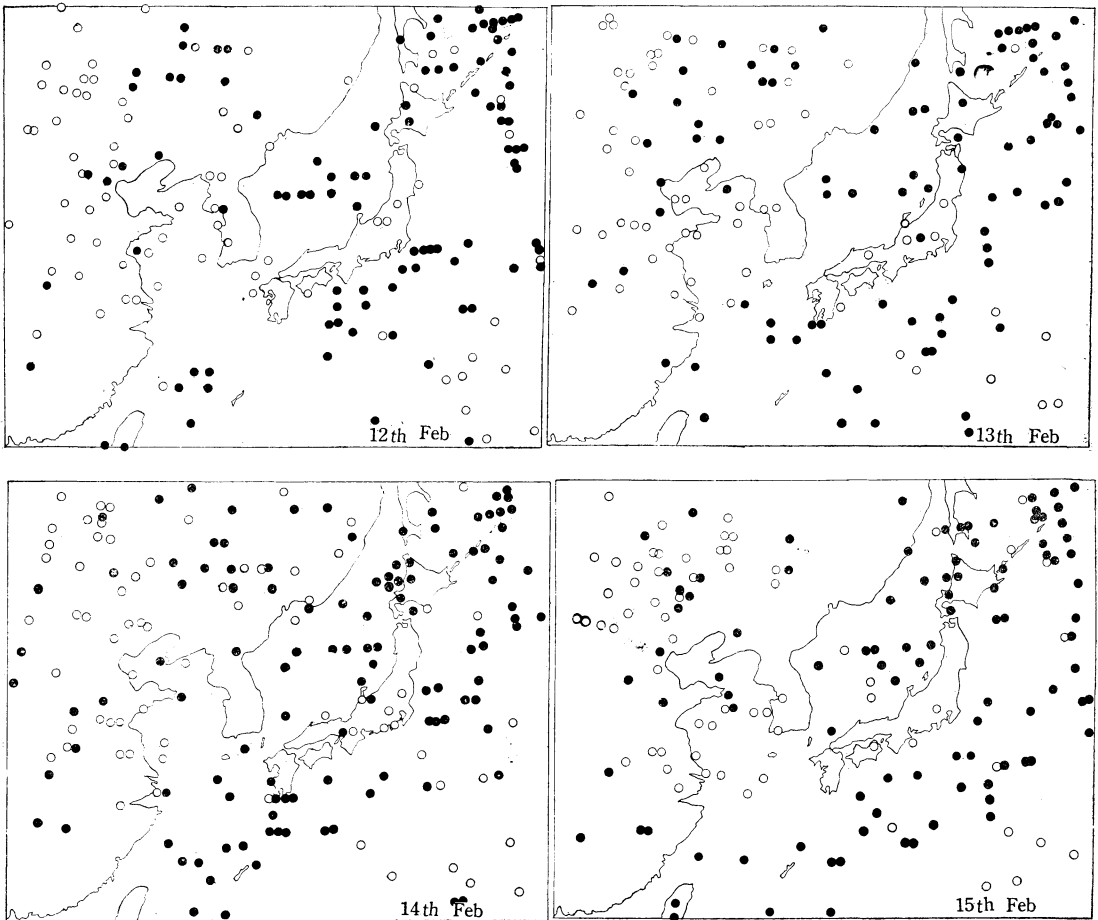
その結果、2月12日には高気圧が大陸から東支那海、本邦列島上にあり、また低気圧が日本海、千島、本邦南岸沿いにある谷の存在を示す。このことから本邦の大部分は天気良く、本邦南岸で天気が悪いことが分る。

13日には本邦列島上の高気圧が南に張り出して関東沖にあった低気圧群が南沖に下がった。また九州西方海上に低気圧が増加した。これにより13日に関東辺が好天となり、本邦の西で天気が崩れる模様に分る。2月14日には本邦周辺の大部分に低気圧が増加し、高気圧は大陸に存在す。そして局地的と思われる高気圧が本邦中央部に存在している。関東東沖に低気圧が存在している。2月15日には高気圧が東支那海辺まで延びてきた。低気圧が本邦南岸および日本海岸、北海道辺にあって千島辺に続いている。

以上の事から、平均等圧線図と対応して13日に関東地域に好天が発現することが分る。



第6図 2月12日~14日の平均等圧線図



第7図 2月13日~15日の高低気圧位置図, 白丸は高気圧, 黒丸は低気圧を示す。

6. 結 論

いままでの事から, 2月13日の好天は関東地域に特に顕著に発現するといえる。そしてそれは等圧線間隔がゆるんで季節風が一時衰え始める途中において, 関東地域における谷が消えた結果発現することが分った。

終りに御指導を賜った加藤教官および長尾教官に感謝いたします。

参 考 文 献

- 1) 殿村清人, 1956: 11月3日の天気について, 天気, Vol. 3, 195-196, 223-227.